

『 On-line みんなで法華経を学ぼう! 』 vol.8

Nov.2022

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra” .
(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華経 譬諭品 第三』 (迹門・正宗分)

- 『又如來の滅度の後に、若し人あって妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も
隨喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)
- 『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)
- 「習学」の3つのステップ 「聞解・思惟・修習」
(『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』 (法師品 二〇九頁三行))
- 『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくこ
とを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)
- 『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、
りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部經 第一卷』 P8・8行/P5・1行)

※表記 例：(P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)

<方便品(後半)の復習>

- 『諸佛如來は但菩薩を教化したもう。～餘乘の若しは二、若しは三あることなし』(六七頁 二行)
- ・【但菩薩を教化したもう】— 菩薩だけを教化して、ほかのものはかまわないというのではなく、人によって早い遅いのちがいはあっても、とにかく菩薩道という一つのルートをすべての人にしらせるのが、仏の教化であるぞ— という宣言なのです。
 - ・【開三顯一】— 大切な所です。～ 仏の目から見れば、究極においては声聞・緣覺・菩薩というような違いはないのです。— 声聞も、緣覺も、自分では気がつかないけれども、じつは仏の境地へ達する道を歩んでいるのであって、今はその途中の段階にいるというだけのことなのだ— という事を見通しておられる。
 - ・【あるのはただ一仏乘】— 二つや三つの教えがあるように見えるのは、方便によってそれぞれの段階の人にふさわしい教えを説いたまでのことであって、真実の教えというのはあくまでも一つしかない— というのです。これが〈一仏乘〉の意義です。
- 『諸佛は五濁の惡世に出でたもう』 (六八頁 終二)

・【五濁の悪世】— ①《劫濁・にじよく》⇒『マンネリ化』。②《煩惱濁・ほんのえよく》⇒『煩惱がさかん』。③《衆生濁・しゅじょうよく》⇒『譲る心がなく我を一方向的に通す』。④《見濁・けんじよく》⇒『自己本位の見方を強引に通す』。⑤《命濁・みょうよく》⇒『目先の利益だけを求める』

・【三乗開会・さんじょうかいえ】— 一つの正法に達する道を、それぞれの機根に依じて三つに分けて説き(開・かい)、そうしてだんだんに一つの道へ導いてゆき、最後に全部一カ所に合わせること(会・え)を「三乗開会・さんじょうかいえ」と言います。

『諸佛如來の但菩薩を教化したもう事を聞かず知らずんば、此れ佛弟子に非ず』(六九頁 三行)

・【二乗作仏・にじょうさぶつ】— この《方便品》は、一言でいえば「だれでも仏になれる」という教えであって、特に声聞・縁覺も仏になれることを、ここで初めて宣言されたものです。それゆえ『二乗作仏』の教えとも言われているのです。

・【悪とは】— ①「修行の歩みをみずから止めること」あるいは②「逆に後戻りすること」 ③「人の正しい歩みを止めさせること」 あるいは、④「逆に後戻りさせること」

・【輪廻】— 〈生有/しょうう〉・〈本有/ほんぬ〉・〈死有/しう〉 ⇒ 〈中有/ちゅうう〉 ⇒ 〈生有〉・〈本有〉・〈死有〉 ⇒ 〈中有〉 ⇒ 〈生有〉・〈本有〉・〈死有〉 ……

・【万善成仏】— ① 六波羅蜜を行ずる。② 仏の滅後にも善軟(ぜんなん・常に向上を志し、真理に対して素直で柔らかな心)を持つ。③ 仏滅後、仏塔を建て供養し、または子どもがたわむれで砂の仏塔を作る。④ 仏像を彫刻し、鑄造を作る。⑤ 仏像を描く。または子どもがたわむれで仏の形を描く。⑥ 仏像や仏塔に供物を捧げ、音楽・仏讃歌を歌う。⑦ 仏を礼拝する。略式の礼拝、片手拝みをする。⑧ ただ一声、「南無仏」と唱える。

・【釈尊の大誓願】—

『我本誓願を立てて一切の衆をして我が如く等しくして異なることなからしめんと欲しき』

(七二頁 終三行)

『諸佛の本誓願は我が所行の佛道を 普く衆生をして亦同じく此の道を得せしめんと欲す』

(七七頁 三行)

『若し法を聞くことあらん者は 一りとして成佛せずということなけん』(七七頁 三行)

・【仏種は縁起によって生ずる】— 「成仏するということは、『縁起』によるものであって、何か特別な存在が成仏したり、他を成仏させたりするものではない」という意味です。つまり、成仏するのもしないも(救われるのも、救われないも)自分の精進次第なのだということです。

『佛種は縁に従って起こると知しめす』(七七頁六行)

・【犛牛(みょうご)の尾を愛するが如し】— 六道をさまよう衆生は、自分のために何の役に立たないものに心が奪われ、それに執着しているために、結果的に自分を不幸にしている。

『六道の衆生を見るに～犛牛の尾を愛するが如し』(七八頁五行)

『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』(八二頁 四行)

<譬諭品のあらすじ>

『方便品』で『若し法を聞くことあらん者は 一(ひと)りとして成仏せずということなけん』、『復諸(またもろもろ)の疑惑なく心に大歡喜を生じて 自(みづか)ら當(まさ)に作佛(さぶつ)すべしと知れ』という、誰もが成仏できるという教えを拝聴して・・・

【舎利弗の懺悔 (誰もが成仏できるという教えを聞いて・・・)】—

【八三頁一行】 **舍利弗(しゃりほつ)**は、踊躍歡喜(ゆやくかんぎ・踊り出したいほど喜ぶ)して立ち上がり、仏さまを仰ぎ見て申し上げました。

【八三頁二行】「世尊から『誰でも仏に成ることができる。そのことに疑念を持つてはならない』という強いお言葉を賜り、踊り出したくなるほどの大感激を覚えています。【(偈) 八四頁 六行】
『心に大歡喜(だいかんぎ)を懐(いだ)き疑網(ぎもう)皆已(みなすで)に除(りぬ)』心は大歡喜に満ち、胸にからまっていた疑いの網はすっかりなくなりました。これまで私は世尊にお仕えし、『誰でも修行を積めば仏に成れる』とのお言葉は伺ってはいました。そして、多くの菩薩たちに授記(仏になれるという保証を与える)される場面を目の当たりにしました。しかしこのことは、私ども声聞や縁覚には無縁の、遠く及ばないことだと思っていました。／『甚(はなはだ)だ自ら如來の無量の知見を失(え)ることを感傷(かんしょう)しき』私どものような声聞や縁覚の境地の者は、所詮、どんなに修行をしても絶対に悟りを得ること(仏に成ること)など無理なことだと諦めており、淋しく、悲しく思っていました」

【八三頁五行】『世尊、我常に獨(ひと)り山林樹下(せんりんじゆげ)に處(しょ)して、～是(こ)の念を作(な)しき』【(偈) 八四頁 終四行】『或(あるい)は林樹の下(もと)に在(あ)って若(し)は坐(ざ)し若(し)は經行(きやうぎやう)して常(じょう)に是(こ)の事(じ)を思惟(しゆい)し嗚呼(うこ)して深く自ら責(せ)めき』「世尊よ。私はただ一人、林の中で木の下で座して瞑想し、歩きながら思索を深める時、いつも次のようなことを思い、嘆き、自分を責めていました。『自分たちは菩薩と同じように世尊のみ教えを同うご縁を頂き、同じく汚(けが)れのない清浄な境地に至っているのに、なぜ世尊は我々には**《大乘の教え》**を説かず、**《小乗の教え》**だけを説かれるのだろうか』と世尊を責める気持ちがありました。／『是(こ)れ我等(わが)が咎(とが)なり、世尊(よ)には非(ひ)ず』しかしこう思うのは、私たちが至らぬせいであり、少しも世尊の責任ではありません。すべては私たちの咎(とが)めとするところであります。／『所因(しよいん)の阿耨多羅三藐三菩提(あうたろさんみょうさんぼだい)を成就(じゆうじゆ)することを説(と)きたもうを待(まち)たば、必ず大乘(だいじやう)を以(も)て度脱(だつだく)せらるることを得(と)ん』なぜならば、そもそも世尊は『仏に成れる大本(こん)となる教え』をお説き下さっておられ、私たちは、何(なに)の心配(しんぱい)も無くお待ちしていれば、いずれは**《大乘の教え》**をくださり、『誰でもが仏に成れる』教えである『**法華経**』を必ずお説き下さるはずであったからです」

【八三頁 終二行】「それなのに私は、世尊からいただく**《方便の教え》**の真意を理解できず、教えの上辺だけを聞いて、すでに悟りを得ていたと勝手に思い込んでいました」

【(偈) 八五頁 六行】『諸(しよ)の菩薩(ぼさつ)を稱讚(しょうさん)したもう』 「ですから他の多くの菩薩たちだけが成仏の保証を頂くのを見て、『自分は授記を頂けない。自分は至らないダメな人間だ』と嘆き、そして『菩薩が得る素晴らしい境地などに、自分には到底、成就できるはずはない。今、自分が悟りを得ていたと思っていたことは、全くの思い過ごしで、自分で自分を騙(だま)していたのだ』と／『終日(しじゆ)竟(けい)究(きう)夜(や) (ひねもすよもすがら) 毎(つね)に自ら剋責(こくしゃく)しき』 昼夜、自分を責めていました」

【八四頁 一行】「しかし只今『**方便品**』にて、仏さまから未だかつて伺ったことの無い尊い教えを頂いて、すべての疑いも悔しい気持ちも、すっかりなくなってしまいました。今は心も体も安らかで、安穩な心持ちでございます。【(偈) 八五頁 七行】『宜(よろ)しきに隨(したが)って法(ほ)を説(と)きたま(え)り無漏(むろ)は思議(しぎ)し難(がた)し衆(しゆ)をして道場(だうじやう)に至(いた)らしむ』世尊は人と時と場合にに応じてふさわしい教えを説かれ、すべての衆生を仏の境地にお導きされます。そのことが今こそハッキリと分かりました」

【舎利弗の一大決意（今は声聞の身だが、菩薩を教化するという決意）】——

そして舎利弗は言葉を続けます。

【八四頁 三行】『今日乃（すなわ）ち知んぬ。眞（しん）に是（こ）れ佛子なり。佛口（ぶつく）より生じ法化（ほうけ）より生じて、佛法の分を得たり』 「今日初めてわかりました。自分は『仏の子なのだ』と。私は仏から生まれ、仏の教化によって『仏法の無限の財産を相続しているのだ』ということが、ハッキリとわかりました」

【(偈) 八六頁 三行】『初め佛の所説を聞いて心中（しんちゅう）大に驚疑（きょうぎ）しき 將（まさ）に魔の佛と作（な）って 我が心を腦乱（のうらん）するに非ずやと』 「じつは世尊はこのお説法の初め（方便品）で、『舎利弗よ。仏の悟りというものは最も難しく、仏でなければ解らないものだ。お前たちには到底解るものではない』と言われました。そのお言葉を聞いて私は大変驚きました。魔物が仏の姿となって私の心を悩ませているのではないかとさえ思いました。しかし段々とお話を伺ううちに、仏は巧みに『方便』を用いられ、さらにそれは真実につながっているということがよく解りましたので、私が持っていた疑いはすっかり晴れました。【(偈) 八六頁 終三行】『世尊は實道（じつどう）を説きたもう 波旬（はじゅん）は此の事（じ）無し 是（こ）を以て我定めて知んぬ 是れ魔の佛と作（な）るには非（あら）ず 我疑網（ぎもう）に墮（だ）するが故に 是（こ）れ魔の所爲（しょう）と謂（おも）えり』 世尊は真実の道をお説きくださっておられるのであって、魔物が真実の教えを説くなどあり得ません。魔物の仕業（しわざ）だと考えたのは、私が愚かな疑念を持ったからであります」

【(偈) 八七頁 二行】『我定（さだ）めて當（まさ）に作佛して～ 無上の法輪を転じて 諸の菩薩を教化すべし』 「世尊よ。私はお誓いします。私は必ず多くの人から敬われる身となり、無上の教えを説いて多くの菩薩を教化致します」

【前世、釈尊が舎利弗を導いていたことを告白】——

舎利弗の力強い決意と懺悔を聞かれた世尊は、舎利弗にむかって告げられました。

【八七頁 四行】「私は、天上界と人間界のあらゆる聖者や修行者たちに明らかにします。舎利弗よ。／（『無上道の爲の故に常に汝を教化す』）前世においてあなたが仏の智慧を得るために、私はあなたを教化してきました。／（『汝今悉（ことごと）く忘れて、便（すなわ）ち自ら已（す）で滅度を得たりと謂（おも）えり』）しかしこの世になってあなたはそのことをすっかり忘れて、私が手始めに説いた教えを聞いただけであなたは満足をしてしまい、完全な涅槃を得たと思込んでしまいました。そこで私は、あなたに『本来の願い』を思い起こさしめるために、あなたをはじめとする多くの声聞の皆さんに、この『法華経』を説くのです」

【舎利弗への授記】——

【八七頁 終三行】「舎利弗よ。あなたは遥（はる）か未来において多くの仏に仕え、菩薩行を完全に実践し、その結果、『仏に成る』ということを保証しましょう。仏の名は『華光如来』、国の名は『離垢(りく)』、時代は『大宝莊嚴(たいほうしゅうごん)』と言います。その国では大地の高低は無く平坦で、清らかで美しく、天人も人間も豊かに生活しています。瑠璃（るり）という宝石が大地一面に敷き詰められ、道の両側は黄金で仕切られています。そして道に沿って七宝（しっぽう）で飾られた並木が連なり、その木々には花が咲き、実がたわわに

実のっています。そして華光如来は三世の諸仏と同様に、／（『本願を以ての故に三乗の法を説かん』）声聞・縁覚・菩薩のために教えを三つに説き分けて教化するのです」

【八八頁 六行】『大宝莊嚴』という時代の名の意味は、／（『菩薩を以て大宝と爲（な）すが故なり』）『菩薩を最大の宝とする』時代であるために、そう名付けられたのです。菩薩たちの数は無数で、みな六波羅蜜を完全に行い、／（『若し行かんと欲する時は宝華（ほうけ）足を承（う）く』）菩薩が歩くひと足ごとに美しい花が咲き出（い）でます。その菩薩たちは現世において、仏の悟りを求めようと心したのではなく、／（『皆久しく徳本を植えて無量百千萬億の佛の所（みもと）に於て淨く梵行（ぼんぎょう）を修し』）みな、前世で無数の仏のもとで善行を積み重ね、徳分を積み、清らかなる身となる修行を続けていた人々です。その心は素直で、正直であり、自分を飾ることが無く、仏道を志す決心は大変固いものです。そうした菩薩が国中に充満しています」

【八九頁 一行】「舍利弗よ。華光如来の寿命は十二小劫という大変長い年月で、その国の人々の寿命も八小劫という長い期間であります。華光如来は入滅の間際、堅満（けんまん）菩薩という菩薩に対して、無上の悟りを得る保証を授記し、華足安行（けそく あんぎょう）如来になることを多くの比丘たちに告げます」

【八九頁 六行】「この華光如来の滅後、仏の教えが正しく伝わる期間、すなわち正法の時代は三十二小劫という長い期間であり、その後、仏の教えは存在するものの、信仰が形だけになった期間、像法の時代が同じく三十二小劫の長きにわたって続きます」

【諸天善神が釈尊へ供養と感謝。今後の決意】——

【九〇頁 終三行】すると、舍利弗への授記を聞いた帝釈天をはじめとする諸天善神が歡喜し、天から曼陀羅華（まんだらけ）を降らして、世尊に感謝の供養を申し述べました。

【九一頁 四行】【(偈) 九一頁 七行】（『佛昔波羅奈（はらない）に於て初めて法輪を轉（てん）じ、今乃（いますなわ）ち復（また）無上最大の法輪を轉（てん）じたもう』）「世尊よ。世尊は波羅奈（はらない）の鹿野苑（ろくやおん）で初めて法を説かれ、そして今、ここに至って最高の教えをお説きくださいました。しかも舍利弗に対して成仏の保証をくださり、なんと素晴らしことでしょうか。私共も、いずれは最上の悟りを得て仏に成れると信ずることが出来ました。私共はこれから一生懸命に精進を致します」と、世尊にむかって今後の精進を誓ったのでした。

【舍利弗の求道。（いまだ法を理解していない者たちのために）】——

【九二頁 三行】すると舍利弗は、今、自分に対して授記された喜びも冷めぬうちに、世尊にこう申し上げたのでした。

「世尊。私は教えに何の疑いもありません。しかしここにおります千二百人の在家・出家の修行者の中には、この尊い法を未だ理解できていない者もいます。また自分はずでに涅槃の境地に達していると思いついでいる者もいます。／（『善哉（ぜんざい）、世尊、願わくは四衆の爲に其（そ）の因縁を説いて疑悔（ぎげ）を離れしめたまえ』）どうかその者たちの誤解と混乱をなくするためにも、さらにみ教えをお説き願います」と懇願したのでした。

【（舍利弗の求道に答えて）『三車火宅の譬え』が説かれる】——

すると世尊は、舍利弗にむかって仰せになりました。

【九二頁 終三行】(『我先に諸佛世尊の種種(しゅじゅ)の因縁・譬諭・言辭(ごんじ)を以て方便して法を説きたもうは』)「舍利弗よ。私はこれまでに《法説/理論・言辭》、《譬諭/たとえ》、《因縁/過去の事例》をもって真理を説いてきました。／(『今當(まさ)に復(また)譬諭を以て更に此の義を明(あか)すべし。諸(もろもろ)の智あらん者、譬諭を以て解(きと)ることを得ん』) それではここであらためて『譬え』を用いて、仏が衆生に『発菩提心』のために法を説くことの意味、なぜ仏が衆生を教化するののかの意味を明らかにしましょう。智慧ある者は誰でも、この『譬え』を聞くことによって悟ることができるでしょう」

【『三車火宅の譬え』】—

【九三頁 一行】——「舍利弗よ。ある町に大長者(大富豪)がいました。大長者はずいぶん年をとっておりましたが、数えきれないくらいの財産を持ち、500人という数多い使用人が住んでいました。屋敷は広大ですが、門はただ一つ、狭い門しかありませんでした。屋敷はそびえ立つ大きな建物ですが、大変古く、柱は腐り、土塀や壁、屋根は崩れかけ、家中にガラクタや汚物が充満するなど、荒れ果てていました」

【(偈) 一〇二頁 四行】「その家にはいろいろな動物が巣を作っていました。トビやフクロウ、カラス、タヌキやイタチ、ネズミやヤモリ、ヘビやマムシ、サソリ、ムカデやゲジゲジ、その他の害虫が縦横に走り回っています。キツネやオオカミが群がり、お互いに噛みあい、踏みつけあって争い、死骸に噛みつきむさぼっています。あちこちで食べ物を求めてあさり、それを見つけると、一斉に飛びかかり、取り合い、引っ張り合って争い、唸(うなり)、歯をむき出して吠え合っています」

【(偈) 一〇二頁 終三行】(『處處(しょしょ)に皆魑(ち)・魅(み)・魍(もう)・魎(りょう) 夜叉(やしや)・惡鬼(あつき)あり』)「あちこちでは動物の化け物や夜叉(やしや)や悪鬼が、人間の屍(しかばね)を引き裂いてむさぼり、鳥や動物が大事に育てる卵や雛(ひな)や子どもを見つけると、育てているそばから取り上げて食べてしまいます。そして腹いっぱい食べても、夜叉どもの悪心がますます盛んになってきて、お互いにいがみ、叫び、恐ろしくおぞましい形相で怒鳴り合っています」

【(偈) 一〇三頁 一行】「鳩槃荼鬼(くはんだき)という悪鬼が、家中を飛び回り、犬を見つけては飛びかかって押さえ込み、足をつかんで仰向けにして打ちたたき、いじめて喜んでいきます。背が高くヒョロヒョロとやせ衰えた色黒い鬼どもが、叫びながら食べ物を探しています。／(『今其(そ)の咽(のんど)鍼(はり)の如し』) またノドが針のように細い鬼もいます。牛のような頭をした鬼もいます。そうした鬼たちが窓から外をのぞいています」

【(偈) 一〇三頁 終四行】「このようにさまざまな悪が満ちている家が、その家の主人が出かけた留守の間、突然火事になり、火は見る見るうちに家じゅうを炎に包みました」

【(偈) 一〇三頁 終二行】「棟(むね)・梁(はり)・柱は音を立てて燃え落ち、諸々の夜叉や鬼どもは大声でわめき叫び逃げまどいます。しかし自分で逃げ出すことができません。穴の中にひそむ者もいました。悪獣(あくじゅう)や毒虫たちも逃げ出さないうちの穴の中にかくれました。しかもこれまでの積んだ業が良くないために、火に迫られても、その苦しみのなかでお互いに傷つけ合い殺し合いをします。小さな獣(けもの)は真っ先に焼け死にましたが、その死骸を大きな獣が我先に群がり、むさぼっています。そして諸々の鬼たちは髪の毛に火が付き、熱さに苦しみ叫びながら家中を走り回っています」

【(備) -0四頁 六行】「その家はこのように恐ろしい有り様でしたが、ある人が、出かけている長者に対して、『あなたの家が火事で、子ども達はその家が恐ろしいことも知らずに、家の中に入って行きました』と教えてくれました。／『先に遊戯(ゆげ)せしに因(よ)って此の宅(たく)に來(き)入(い)し』子どもたちは遊びに夢中のあまり、家が燃えていることに気づかず、その家に入って行ったのです」

【九三頁 七行】『即(すなわ)ち大(おお)いに驚怖(きょうふ)して是(こ)の念(ねん)を作(な)さく』「父親である長者は、子ども達が火宅の中にいることを知り、大変驚きました。父はとっさに考えました。『私はこの燃えさかっている家から離れて安全な場所にいる。しかし子ども達は火に包まれた家の中にいる。しかも遊びに夢中になっているため火に焼かれそうになっても一向に気づかず、また我が身に炎が迫っていても、それを苦痛に感じずに逃げようともしない』。／『我(わが)身(み)手(て)しんしゅに力(ちから)あり。當(まさ)に衣(え)襪(は)を以(も)てや若(わか)しは几(き)案(あん)を以(も)てや、舍(いえ)より之(これ)を出(い)だすべし』そして、『私は力を持っているので、子ども達を箱か台のようなものに載せて、一気に外へ運び出そうか』と思いました」

【九三頁 終行】『復(また)更(さら)に思惟(しゆい)すらく、是(こ)の舍(いえ)は唯(ただ)一(いつ)門(もん)あり而(しか)も復(また)狭小(きょうしょう)なり』「しかし考え直しました。『この屋敷の門は一つしかなく大変狭い。しかも子ども達は幼いためにこの門の狭さを知らないでいる。そして遊びに夢中になって火の恐ろしさに気付こうともしないでいるために、一方的に力づくで運び出そうとしても、その手からこぼれ落ちて火に焼かれてしまわないとも限らない。まずはこの火の恐ろしさを知らせてやるのが先決だ。この家は燃えているのだ！だから早く逃げ出さない！と知らせ、この火宅から逃げるよう仕向けることが大切だ』と考えました。【(備) -0四頁 終四行】『長者(ちやうじや)聞き已(おわ)って、驚(おど)いて火宅(かたく)に入る』そして父は火宅の中に飛び込んで大声で叫びました。『このままでは焼け死ぬぞ。恐ろしい化け物や獣(けだもの)もいて危険だ。だから早く外へ出なさい』と必死に伝えました」

【九四頁 四行】「ところが子ども達は、父親の声を聞こうともしません。遊びに夢中になっているため、／『亦(また)復(また)た何者(なにもの)か是(こ)れ火(か)、何者(なにもの)か爲(な)るを(を)かを失(な)すを知らず』『火とはどんなに恐ろしいものであるのか？ 今、住んでいる家とは一体どんな家なのか？ 火によって失われるものとは何か？ 死とは何か？』ということを知ろうとも、解ろうともせず、／『父(ちち)を視(み)て已(や)みぬ』父の顔をチラリと見るだけで、いっこうに逃げ出そうともしませんでした」

【九四頁 七行】／【(備) -0五頁 五行】「そこで父は、最後に考えました。『このままでいると子ども達は、炎に包まれて焼け死んでしまう。こうなれば《方便》を用いて救い出すしかない…。そうだ！子ども達はそれぞれに好きな物がある。珍しい物や面白い物、おもちゃなどに心ひかれていたな。よし！その欲しがっていた物をあげると言えば、それに釣られて出て来るに違いない』。そしてこう叫びました。『ここにお前たちの好きな羊の引く車・鹿の引く車・牛の引く車、これらが門の外にあるぞ。どれでも好きな物を取りなさい！』と」

【九五頁 二行】／【(備) -0五頁 終四行】「すると子どもは現金なもので、『自分の願いがかなう！欲しいと思っていた物がある！』と、今度はお互い押しのけ、我先に争って門の外へ出て来ました。そして子ども達は安全に四辻(よつじ)に逃げ出すことができました」

【九五頁 四行】／【(備) -0五頁 終三行】「父は子ども達が火宅から安全に逃げ出したことを見届け

て、心から安心し、喜びます」

【九五頁 六行】/【(偈) -0六頁 四行】「子ども達は、安心し喜ぶ父の姿を見つけると、口々に『お父さん。はやく車（羊車・鹿車・牛車）をください！』と一斉にせがみます。／（『長者各（おのおの）諸子（しよし）に等一（とういつ）の大車を賜う』）すると父は、子ども達が望む車ではなく、それらよりも立派な大きい車をみんなに等しく与えたのでした。その車は高く広く、数々の宝石が散りばめられ、外装も内装も素晴らしく、力強く、風のように素早く、そして真っ直ぐ走り、美しい純白の牛が引く車です。しかも車のまわりには護衛や召使（めしつか）いがお供しています。このような大変素晴らしい車を、父は等しく子ども達に与えたのでした。すると子ども達は歡喜踊躍（かんぎゆやく）して喜び、その車に乗って自由自在の楽しみを味わうことが出来たのでした」

【九五頁 終行】/【(偈) -0六頁 七行】「なぜ長者が、みんなにこのような素晴らしい大白牛車を与えることが出来たのかと言いますと、／（『是（こ）の大長者財富（ざいふ）無量にして、種種（しゅじゅ）の庫藏（こぞう）悉（ことごと）く皆充溢（じゅういつ）せり』）長者の富は無限であり、数多くの倉庫に大白牛車が、あふれんばかりにあるからです。しかも長者はこう思っていました。『私は無限の財産を持っている。だからつまらない車を子ども達に与えて、どうなると言うのか。／（『當（まさ）に等心（とうしん）にして各各（かっかく）に之（これ）を與（あた）うべし、宜しく差別（しゃべつ）すべからず』）この子らはみんな私の可愛い子ども達だ。どの子が可愛くて、どの子が可愛く無いなどと言う《差別》などない。みんな《平等》に可愛い子ども達だ。私はこの大白牛車を、国中の全ての人に与えても余りあるほど持っている。だから、どうして私の可愛い子ども達に与えないでいようか』と。父は子ども達全員に等しく、尊い大白牛車を与えたのでした。—— 以上【『三車火宅の譬え』】

【『三車火宅の譬え』での父の行動の是非について、舍利弗に問う】——

【九六頁 七行】この『三車火宅の譬え』を説かれた世尊は、舍利弗に問いかけられました。

「子ども達はこの素晴らしい大白牛車に乗って、今まで体験したことのない喜びを得ました。しかし厳密に言えば、子ども達が最初に望んでいた物を与えた訳ではありません。舍利弗よ。あなたはどう思いますか？／（『寧（むし）ろ虚妄（こもう）ありや不（いな）や』）この長者は嘘をついたことになりますか？」

【世尊の問いに対する舍利弗の応え】——

【九六頁 終四行】舍利弗が応えます。

「いいえ。世尊よ。子ども達が火から逃れ、命が助かっただけでも嘘をついたことにはなりません。長者が好きなおもちゃをあげると言ったのは、火宅から逃れさせるための“慈悲の方便”であったのですから、少しも非難されるものではありません。たとえ小さな車さえも与えなかったとしても、それは嘘にはなりません。ましてや長者は『無量の財産を持っているので、いくらでも子ども達に与えて幸せにしよう』と思っていたのですから、長者は嘘をついたということには決してなりません」と申し上げました。

【世尊の応答。『三車火宅の譬え』を噛み締め、仏の智慧と慈悲について】——

【九七頁 四行】舍利弗の答えを聞かれた世尊は、お言葉を続けられました。

「その通りです。長者は嘘を言ったことにはなりません。じつはこの『長者』の存在がほかでもありません『仏』なのです。／（『一切世間の父なり』）すなわち一切の者の『父』であり、仏は、またこの長者のように、すべての怖れ・衰え・悩み・心配・無智から生まれる悩み・苦しみ・貪り・怒りから永久に離れた存在なのであります」

【九七頁 六行】「仏は計り知れない深い智慧、大きな神通力と智慧力、すなわち《智慧》と《方便》の両方を完全に具えています。／（『大事大悲常（つね）に懈倦（けげん）なく、恒（つね）に善事を求めて一切を利益（りやく）す』）また、すべての衆生を救う大慈大悲を具えており、常に衆生を幸せにしようと行い続けているものです。そういうすぐれた徳と力を具える仏が、なぜ大火に包まれ、苦悩に満ちた古ぼけて荒れた家のようなこの世に現われ、存在するのかと言えば、それはほかでもありません。衆生の誰もが持つ生老病死、怖れ・衰え・悩み・心配・無智から生まれる悩み・苦しみ・貪り・怒りから救い出し、さらに衆生を仏法に導いて仏の智慧を悟らせるために、この世に現われるのであります」

【九八頁 二行】「衆生はこの苦の世界にしながら、その実体を知らずに一時的な喜びを追い求め、享樂にふけり、わが身に火が迫ってもそれを感じず、驚かず恐れもしないのです。またそれを厭（いと）う心も生じず、離れようという心も起こしません。ただこの三界の火の家の中を、あちらこちらへと走り回るだけで、／（『大苦に遭うと雖（いえど）も以て患（うれい）とせず』）大きな苦しみに出会っても、真に解決しようと心配もしないのです」

【九八頁 五行】「仏はこのような衆生を見て、考えました。／（『我はこれ衆生の父なり』）『私は一切衆生の父親である。私は全ての者たちの苦を取り除き、無限の智慧を与えて、素晴らしい人生を送れるようにしてあげなければならない』と。／（『方便を捨てて、諸（もろもろ）の衆生の爲に如來の知見・力・無所畏を讚（ほ）めば、衆生是（こ）れを以て得度すること能（あた）わじ』）そして、もし私が《方便》を用いず、一足飛びに仏の智慧を示したならば、決して救うことはできないでしょう。なぜなら、この人たちは火宅の中にいて、自分の身が焼かれていても、そのことに気付いていないため、高くて奥深い仏の智慧を直ぐには理解できるものではないからです」

【九八頁 終二行】「舍利弗よ。この譬え話で長者は大きな力を持っていても、力づくで火宅の子ども達を一気に救ったわけではありません。《方便》を用いて子ども達全員を、自ら火宅から避難させ、そのあとで、等しくみんなに最高の大白牛車を与えたのでした。／（『如來も亦復（またまた）是（かく）の如し』）如來も同様です。まずは声聞乗・縁覺乗・菩薩乗の三つの教えを説くのはそのためです」

【「早く三界から抜け出て、精進せよ」と奨励】——

【九九頁 三行】（『汝等（なんだち）樂（ねが）って三界の火宅に住することを得（え）ること莫（なか）れ』）
「皆さんは、いつまでもこの苦の世界に住んではいけません。つまらない五官の楽しみを貪ってはいけません。貪り、執着して渴愛のままに生きていけば、結果的に我が身を焼き尽くすことになって行くことになります。皆さんは早くこの苦の『三界』（欲界・本能的な欲望の世界。色界・物質から離れられない世界。無色界・物質にとらわれない世界）から抜け出て、／（『當（まさ）に三乗の聲聞・辟支佛・佛乘を得（う）べし』）まずは声聞乗・縁覺乗・菩薩乗の三つの教えのどれでも良いので、それに入りなさい。そうすれば、／（『我（われ）今汝（いまなんじ）が爲に此の事を保任す、終（つい）に虚（むな）しからず。汝等（なん

だち) 但當(ただまき)に勸修(ごんしゅう)精進(しんじん)すべし』 最終的には真の智慧を得ることになるということを、私は責任をもって保証します。嘘ではありません。皆さんは私の言葉を信じて、懸命に修行し、精進に励みなさい」

【九九頁 七行】「よくよく知りなさい。仏が説く三乗の教えは、すべての聖者が讃歎するもので、／『自在無繫(じざいむけい)にして依求(えぐ)する所なし』《一仏乗の教え》、《諸法の実相》の教えによって真の自由を得、苦を完全に断ち切ることができます。地獄・餓鬼・畜生・修羅などの六道から離れ、そればかりか**五根・五力**という仏道精進の根本となる要素を具え、**七覚支(しちかい)**と言う悟りを得る七つの道を成就することができるのです」

【真理を三乗に説き分ける理由。仏の智慧と慈悲『方便』】——

【九九頁 終二行】「舍利弗よ。ある人がいて、心のどこかで『智慧』を求める気持ちがあり、心から精進して、迷いと苦の世界から速やかに離れたいと涅槃を求める修行の在り方を《声聞乗》といい、／『彼(か)の諸子(しよし)の羊車(ようしゃ)を求むるを爲(もつ)て火宅を出(い)ずるが如し』 それはちょうど長者の子たちが羊の車を求めて火宅から走り出ると同じであります」

【一〇〇頁 二行】「もしある人がいて、心から精進して、自然に真理を悟る『智慧』を求め、一人静かに思いを凝らす喜びを持って、この世の様々な因縁を知ることが出来たとしましょう。そういう修行の在り方を《縁覚乗》といい、／『彼(か)の諸子(しよし)の鹿車(ろくしゃ)を求むるを爲(もつ)て火宅を出(い)ずるが如し』 それはちょうど長者の子たちが鹿の車を求めて火宅から走り出ると似ています」

【一〇〇頁 五行】「もしある人がいて、懸命に精進し、仏の『智慧』を求め、多くの人をあわれみ、人々に安樂を与え、天上界・人間界のすべてを救う行いをしたとしましょう。そういう修行の在り方を《菩薩乗》といい、《大乘》と名付けるのです。菩薩とは大乘を求める人たちで摩訶薩(まかさつ)と言い、また大士(だいし)と言います。／『彼(か)の諸子(しよし)の牛車(ごしゃ)を求むるを爲(もつ)て火宅を出(い)ずるが如し』 それはちょうど長者の子たちが牛の車を求めて火宅から走り出ると似ています」

【一〇〇頁 終三行】「舍利弗よ。長者は子ども達が安全に火宅から逃げ出したのを見届けて、／『等しく大車を以て諸子(しよし)に賜えるが如く、如來も亦復(またまた)是(かく)の如し』 すべての子ども達に平等に**大白牛車**を与えましたが、まさに如来はその長者のようなものであります。／『これ一切衆生の父なり』 まさしく一切衆生の父であります」

【一〇一頁 終四行】「仏が三乗の教えを説き分けて本当の悟りへと導くのは、それはほかでもありません。仏は智慧・力・無所畏という全ての徳目を無限に具えているために、一切衆生にいくらでも与えることができるのです。しかし、／『但(ただ)盡(つ)くして能(よ)く受けず』 衆生は初めからそれを完全に受け止める力を、具えていないから、『諸佛方便力の故に、一佛乘に於て分別して三と説きたもう』 諸仏は、《方便力》をもって、一仏乗を三つに分けて説くのであります」

【『主・師・親の三徳』】——

世尊は言葉を続けられました。

【(偈)一〇七頁五行】『三界は安きことなし猶(な)お火宅の如し衆苦(しゅく)充滿して甚(はなは)だ怖畏(ふい)すべし』「誠にこの世界と言うものは、凡夫にとって少しも安らかなところではありません。この世は火のついた家のようにあります。様々な苦に満ちて、恐ろしいかぎりです。ところが私はこの苦しみの世界、迷いの世界から離れ、安穩の境地にいます。／『今此の三界は皆是れ我が有(う)なり 其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり 而(しか)も今此の處(ところ)は諸(もろもろ)の患難(げんなん)多し 唯我(ただわれ)一人(いちにん)のみ能(よ)く救護(くご)を爲(な)す』 この三界は私のものです【主】。その中にある衆生は全て私の子です【親】。そしてこの世の苦しみ・悩みを救うことが出来るのは私だけしかいません【師】。どうして衆生を放っておくことができますか」

【(偈)一〇七頁終三行】「しかし衆生を救おうとして教えを説いても、人々はなかなかその教えを信じ、受け止めようとはしません。／『諸(もろもろ)の欲染(よくぜん)に於て貪著(とんじゃく)深きが故に是(ここ)を以て方便して爲(ため)に三乗を説き』 なぜかといえば、人々は欲望をむさぼり、執着の心が深いために、教えを素直に受け止めることが出来ないのがあります。そこで私は《方便》を用いて、衆生のそれぞれの機根に合わせて三つの教えを説き分けたのです」

【(偈)一〇七頁終行】「若し衆生が『一仏乗の教え』、『諸法の実相』の教えを聞いて、教えから離れることが無ければ、後戻りすることのない菩薩の境地を得ることが出来ます。／『汝舍利弗 我衆生の爲に 此の譬諭を以て 一佛乗を説く 汝等(なんだち)若(も)し能(よ)く是(こ)の語(ことば)を信受せば 一切皆當(みなまさ)に 佛道を成ずることを得べし』 舍利弗よ。私は衆生のためにこの『譬え』を用いて『一仏乗の教え』を説くのです。もしこの教えを心から信受すれば、一切の人々は必ず『仏の悟りを成就』することが出来ます。／『是(こ)の乗(じょう)は微妙(みみょう)にして清淨第一なり～ 諸(もろもろ)の菩薩及び聲聞衆と此の寶乘(ほうじょう)に乗じて直(ただち)に道場に至らしむ』 仏の悟りは大変奥深く、迷いや汚(け)かれから離れている清いもので、これ以上のものはありません。私は凡夫をそうした素晴らしい境地へ導き、多くの菩薩や声聞たちを仏の悟りに至らしめるのです」

【(偈)一〇八頁終三行】『舍利弗に告ぐ汝諸人等(なんじしよにんら)は皆是(みなこ)れ吾が子なり 我は則(すなわ)ち是(こ)れ父なり』「私は皆さんに宣言します。あなた達はすべて私の子です。私は皆さんの父であります。ここにいるあなた方は長い間、様々な苦しみに身を焼いてきましたが、私はそこから一応、救い出させてやることが出来ました」

【『苦』原因は「貪欲」。ただし、『苦』からの解脱は真の『涅槃』ではない】——

【(偈)一〇八頁終二行】『我先に汝等(なんだち)滅度すと説くと雖(いえど)も 但(ただ)生死を盡(つ)くして 而(しか)も實(じつ)には滅せず』「皆さんは『苦からの解脱』を真の悟り、涅槃だと思っていたのですが、それは単に『人生の変化に心がとらわれなくなった』だけのことであって、最終的な涅槃・真の悟りではないのです。／『今作(いまな)すべき所は 唯(ただ)佛の智慧なり』 今、皆さんが成すべきことは、真の悟り、すなわち仏の智慧を得ることです」

【(偈)一〇九頁一行】「ここにいる者たちのなかで、真の仏の悟りを求める者がいるならば、諸仏が説く真実の教えを聞きなさい。諸仏は《方便》を用いて《真理》を説くのです。／

『所化(しょけ)の衆生は皆是(みなこ)れ菩薩なり』 その《方便》の教えによって教化された人々は、自分がどのように考えていようが、その人はじつはすべて菩薩なのであります

【(偈)一〇九頁五行】『苦の本(もと)を知らず深く苦の因に著(じゃく)して暫(しばら)くも捨つること能(あた)わざる』「衆生は《苦》の原因が《欲》であるということに気づかず、いつまでも執着する心から離れられずに苦しんでいます。／『諸苦(しよく)の所因(しょいん)は貪欲(とんよく)これ本(もと)なり』 よいですか。 全ての《苦》の原因は何であるかと言えば、それは《貪欲》こそが根本原因なのです。／『若(も)し貪欲(とんよく)を滅すれば依止(えし)する所なし』 もし《貪欲》を滅しさえすれば、《苦》はたちどころに消滅してしまいます。／『諸苦(しよく)を滅盡(めつじん)するを第三の諦(たい)と名(なづ)く滅諦(めつたい)の爲の故に道(どう)を修行す』 その《苦》を無くした状態、《滅諦》を実現するには、《滅諦》を実現する《道諦》、すなわち《八正道》を実践することです」

【(偈)一〇九頁終三行】『但(ただ)虚妄(こもう)を離るるを解脱を爲(う)と名(なづ)く其(そ)れ實(じつ)には未だ一切の解脱を得ず』「なぜ《苦》から解脱することができたのかと言いますと、それは、実体のない現象を実体があるように考える『妄像』から離れることができたためです。それによって『解脱』を得たといえるのです。しかし、《苦》から解脱しただけでは、真の《悟り》、つまり『真の涅槃』を得たことにはなりません

【(偈)一一〇頁四行】『若(も)し聞くこと有る者隨喜(ずいき)し頂受(ちようじゆ)せん當(まさ)に知るべし是(こ)の人は阿鞞跋致(あびばち)なり』「大切なことは《諸法の実相》の教え知ること、この《諸法の実相》の教えを聞いて、心から有難いと思う人は《不退転の菩薩》です。しかも前世に於いて仏に帰依しその教えを聞いた人に違いありません。舍利弗よ。／『若(も)し人能(ひとよ)く汝が所説(しよせつ)を信ずること有らんは即(すなわ)ち爲(こ)れ我を見』 あなたがこの《一仏乗の教え》、《諸法実相》の教えを他人に説いて、それを信ずる人がいたならば、その人はとりもなおさず私(仏)と会ったのと同じであります

【法華經に出遭うことのない者、法華經行者を謗(そ)る者の不幸】——

【(偈)一一〇頁終五行】『斯(こ)の法華經は深智(じんち)の爲に説く淺識(せんしき)は之(これ)を聞いて迷惑して解(さと)らず』「法華經は深い智慧を具えた人のために説くもので、智慧の浅い人は法華經の真意を理解することができません。きっと当惑するばかりです。この法華經は、深い智慧をそなえた人のために説く教えでありますから、まだ智慧が浅く、ものごとの表面や目先だけを見ている人、根本をつかむことのできない人は、法華經の教えを聞いても、何のことかわからず、かえって当惑するばかりです。舍利弗よ。／『憍慢(きょうまん)・懈怠(けだい)我見(がけん)を計する者には此の經を説くことなかれ』 まだ知り得ていないものを知り得たかのように思い、悟りを得ていないのに悟ったように錯覚しているよううぬぼれた人、つまり『そんなことは知っている。そんなことはわかっている。そんなことはやっている』と考えている人には、この教えをそのまま説いてはなりません。その人が自分勝手に誤解するだけです」

【(偈)一一一頁二行】『若(も)し人信ぜずして此の經を毀謗(きほう)せば則(すなわ)ち一切世間の佛種(ぶつしゆ)を斷(だん)ぜん』「ですから、もしある人が法華經を聞いて信ずることが出来ず、悪口を言いふらすことがあるならば、それは法華經が世に広まることを断ち切ることになりま

すから、大變恐ろしい大きな罪を犯したことになる」と言わなければなりません。／『其(そ)

の人命終(ひとみょうじゅ)して阿鼻獄(あびごく)に入(い)らん』そのような人は死んだあと阿鼻地獄に落ちるでしょう。そして一劫という気の遠くなるような長い期間苦しみ続け、その後はその他の様々な地獄を転々とします。そして地獄からようやく抜け出したとしても、畜生となって生まれ、体は瘦(や)せこけ、人間からなぶりものにされ、いつも飢えと乾きで苦しみます。こうして生きていうちはずっと苦しみます、死んでから屍(しかばね)に石を投げつけられます。／『佛種(ぶつしゅ)を斷(だん)ずるが故に斯(こ)の罪報(ざいほう)を受けん』なぜこのような報いを受けるのかといえば、法華經を謗(そ)り、法が広まることを断ち、人々が仏の悟りを得ることを妨害したためなのです」

【(偈) 一一頁 終行] 「あるいは口バヤラクダに生まれ変わり、いつも杖や鞭(むち)で打たれながら重い荷物を運ばされます。／『但(ただ)水艸(すいそう)を念(おも)うて餘(よ)は知る所(ところ)なけん』そして『水はないか、エサはないか』と、ただそれだけを追い求める日々を送ります。もし犬に生まれ変わったならば、体は皮膚病でただれ、片目を失い、子ども達から打ちたたかれ、苦痛のなか死に至るでしょう。そして次に大蛇に生まれ変わり、地面を這(は)いずり回り、小さい虫にたかられて食いちぎられ、昼も夜も苦しみます、休まる時がありません。／『斯(こ)の經を謗(ほう)ずるが故(ゆえ)に罪を獲(う)ることは(かく)の如し』これも法華經の教えを謗(そ)った罪による報いでもあります」

【(偈) 一一二頁 終五行] 「たとえ人間に生まれ変わったとしても、眼・耳・鼻・舌・身・意のはたらきが整わず、何を言っても人からは信用されず、息は常に臭く、鬼や魔物が憑(と)りつきやすい人となります。病気がちで体はやせ細り、頼りになる人はなく、人を頼っても親身に目をかけてもらうことはありません。それよりもましな身分に生まれたとしても、すぐに物や財産を無くし、不幸な目にあい、／『設(たと)い良藥(りょうやく)を服(く)すとも而(しか)も復(また)増劇(ぞうげき)せん』病気になって薬を飲んでもその薬が毒に変わり、看病をしてくれる人もいません。何事も裏目裏目の不運の人生を送ります。他人からの裏切りだけでなく、無実の罪、濡れ衣を着せられる災難を受けます。／『永(とこ)く佛(ほとけ)衆聖(しゅじょう)の王(おう) 説法教化(せっぽうくわくわ)したもうを見(み)たてまつらじ』そして仏に会うことが出来ず、教えを耳にすることもできないでしょう。正法を聞くことのない場所に生まれ、気の遠くなるような長い期間、正しい教えを得ることができません。そのために地獄界、修羅界や餓鬼界、畜生界などの『四惡道』が当たり前の人生を送ります。／『斯(こ)の經を謗(ほう)ずるが故(ゆえ)に罪を獲(う)ることは(かく)の如し』法華經を謗(そ)る者の罪は、こんな報いとなって現れるのです」

【(偈) 一一三頁 終行] 「舍利弗よ。このように法華經を謗(そ)る者の罪をあげるとキリがありません。／『是(こ)の因縁(いんげん)を以(もつ)て我(われ)故(こと)に汝(なんぢ)に語(かた)る無智(むち)の人(ひと)の中(なか)にして此(こ)の經(きやう)を説(と)くこと(こと)なかれ』そういう理由があるから、無智の者、憍慢の者に対しては、法をそのまま説くのはやめなさいと申しているのです。この教えは機根の低い人には誤解を生じますので、そういう人には法華經を直接説くことができません。方便が必要なのです」

【舍利弗に対して、法華經流布を託す(付嘱)。法華經は誰のためにあるか。】——

【(偈) 一一四頁 三行] 『若(も)し利根(りこん)にして智慧(ちゐ)明(あ)了(りょう) (みょうりょう) に多聞(たもん)・強識(ごうしき)にして佛道(ほとけだう)を求(もと)むる者(もの)あらん 是(こ)の如(ごと)き人(ひと)に乃(すなわ)ち爲(ため)に説(と)くべし』「しかし、機根が優れていて最高の仏の悟りを求める志のある者がいたならば、そのような人にこの教えを

説いてあげなさい。 / (『諸(もろもろ)の善本(ぜんぼん)を植え 深心(じんしん) 堅固(けんご)ならん〜常に慈心(じしん)を修し 身命(しんみょう)を惜(おし)まざらん〜善友(ぜんぬ)に親近(しんごん)するを〜常に一切を慇(あわれ)み 諸仏(しよぶつ)を恭敬(くぎょう)せん 是(かく)の如きの人に乃(すなわ)ち爲(ため)に説くべし』) 過去世に於いて善行と積み、現世に於いて信心が深い人、また悪友から離れて善友と親しくしようとしている人、また怒ることなく誠実で、つねに憐(あわれ)みの心を持ち、仏を深く敬う人、法を求め、合掌して教えを受け止める人、しかも最上の教えを求め受持する人、高い教えを求め、仏教以外の教えに惑わされない人、どうぞこのような人々に法華経を説いてください

【(偈)一一頁終三行】「舍利弗よ。このように仏道を求める人たちは、 / (『則(すなわ)ち能(よ)く信解せん 汝當(なんじまき)に爲(ため)に妙法華経を説くべし』) 必ずこの教えを信解することができます。そのような人に法華経を説くのです」と説かれ、『警諭品』を結ばれました。



ほとけ
仏とは (P23・1行/P14・終7行)

世の中でいちばん自由自在な人はだれかといえは、もちろん仏です。～

じょうぶつ
成仏とは (P29・4行/P18・終行)

〈成仏〉ということは、どんな人にもできないことではありません。～

《**息**惟のひととき ①》

仏とは「雨が降ろうと風が吹こうと、何事が起こっても心を煩わせることなく、安らかな気持で自由自在な心でいられる境地です。そして、そういう「仏」に成ることは、どんな人にもでもできることだと開祖は説かれます。

— そこでこれまでの私を振り返って、「大変なことや心感わす事が起きて、心を煩わせることのない心境(仏の境地)でいることが出来た」ことはないか? そのことを振り返ってみましょう。そしてそのことが、たとえ一瞬でも出来たならば、なぜ、そうした境地でいることが出来たのか。その「理由」を考えてみましょう。

『今日乃ち知んぬ。真に是れ佛子なり。佛口より生じ法化より生じて、佛法の分を得たり』 (八五頁 二行)

《**息**惟のひととき ②》

舍利弗が「今日初めてわかりました。自分は『仏の子なのだ』と。仏から生まれ、仏の教化によって『仏法の無限の財産を相続しているのだ』ということが、ハッキリとわかりました」と述べています。(『今日乃(すなわ)ち知んぬ。真に是れ佛子なり。佛口より生じ法化より生じて、佛法の分を得たり』)

— 今、こうして「法華経」を学ぶ私自身を振り返り、噛み締めてみましょう。

十八不共の法

(P45・終5行/P32・3行)

○【過ちがない行動】一

- ①身に失なし（行いに過ちがない）。
- ②口に失なし（言葉に過ちがない）。
- ③念に失なし（心に散乱がなく、間違った考えを持たない）。

○【心の持ち方】一

- ④異想(いそう)なし（選り好みや、えこひいきがない）。
- ⑤不定心(ふじょうしん)なし（行住坐臥、禪定の境地でいられる）。
- ⑥知り已(おわ)って捨てざるなし（諸行無常がわかっているので、心に執着がない）。

よく捨てるものはよく得る

(P48・1行/P38・終4行)

この「よく捨てる」ということが〈無限のものを得る〉秘訣だということを、われわれはよく心得ておかなければなりません。～

(P49・5行/P34・終6行)

(十八不共法のつづき…)

○【衆生済度の心のはたらき 六つの徳】一

- ⑦欲無減(よくむげん)（一切衆生を救おうという意欲が、減ることがない）。
- ⑧精進無減（一切衆生を救おうとする精進が、減ることがない）。
- ⑨念無減(ねんむげん)（衆生を思う一念がいつも変わらない）。
- ⑩慧無減(えむげん)（仏の智慧が無限）。
- ⑪解脱無減（あらゆる欲望や煩惱から、完全に解脱している）。
- ⑫解脱知見無減(げだつちけん むげん)（自らの解脱とその順序を、つまびらかに知っている）。

○【智慧に基づく身・口・意の三業】一

- ⑬一切の身業(しんごう)智慧に随(したが)って行う（正しい行動ができる）
- ⑭一切の口業(くごう)智慧に随(したが)って行う（正しい言葉づかいができる）
- ⑮一切の意業(いごう)智慧に随(したが)って行う（正しい思考ができる）

○【智慧によって三世を知る】一

- ⑯智慧をもって過去世を知ること無碍(むげ)なり（過去を正しく振り返ることができる）
- ⑰智慧をもって未来世を知ること無碍なり（未来を正しく予見することができる）
- ⑱智慧をもって現在世を知ること無碍なり（現在を正しく見通すことができる）

《思惟のひととき ③》

「仏」が具える十八の特質（『十八不共の法』）のなかで、私はどれを求めたいか？（どれを目ざしたいか？）を考えてみましょう。

…そしてその徳目を、今日からの修習（実践）に生かすには、「何を心がければ良いか？」、「まずは何を実践すれば良いか？」を考えてみましょう。

舍利弗の決意

『我^{われ}定^{さだ}めて當^{まさ}に作^さ佛^{ぶつ}して天^{てん}・人^{にん}に敬^{うやま}わるることを爲^え無^む上^{じょう}の法^{ほう}輪^{りん}を転^{てん}じて諸^{もろもろ}の菩薩^{ぼさつ}を教化^{くわくわ}すべし』 (八七頁二行)

《愚^し惟^{ゆい}のひととき ④》

声聞である舍利弗が「多くの菩薩を教化します」と決意していますが、このことをあなたはどのように解釈し、受け止めますか？ 考えてみましょう。

菩薩を以て大宝と為す

(P86・終3行/P62・終3行)

『其^その国^{こく}の中^{ちゆう}には菩薩^{ぼさつ}を以^{もつ}て大宝^{だいほう}と為^なすが故^{ゆえ}なり』 (八八頁七行)

『国宝(こくほう)とは何物(なにもの)ぞ 国の宝とは何か。
宝とは道心(どうしん)なり 宝とは、道を修めようとする心である。
道心ある人を この道心を持っている人こそ、
名(な)づけて国宝と為(な)す 社会にとって、なくてはならない宝である。
故(ゆえ)に古人(こじん)の曰(いわ)く それゆえ中国の昔の人は言った。
径寸(けいすん)十枚 「直径3センチの宝石10個
是(こ)れ国宝に非(あら)ず それが宝ではない。
一隅(いちぐう)を照(てら)らす 社会の一隅にいなから社会を照らす生活をする。
此(こ)れ即(すな)ち国宝なりと』 その人こそが、なくてはならない国の宝である』
と。

※「山家学生式・さんげがくしょうしき」一

(伝教大師最澄が法華経を基調とする日本天台宗を開くにあたり、人材育成を桓武天皇に上程した書)

正法・像法・末法

(P94・4行/P69・2行)

〔**正法**〕 仏の教法が正しく行われている。 教・行・証がそろっている時代。
〔**像法**〕 教えと行が形式で残っている、教と行があって、証のない時代。
〔**末法**〕 教えだけが残って、大衆がそれを見失っている。行と証が失われた時代。〕

五蘊(ごいん)盛苦(じょうく)

(P106・1行/P79・4行)

①<色・しき> 物事。形や相。②<受・じゆ> 物事に触れると、それによって感情が起きる。③<想・そう> 起きた感情で、考え(想)が生まれる。④<行・ぎょう> その考えによって行動が生まれる。⑤<識・しき> 以上の4つによって、意識として残る。

さんしゃかたく たと
三車火宅の警え

(P116・1行/P86・終行)

〈唯一門(ただいちもん)あり)― 「我を捨てる」こと。①我は「貪欲」であること。②「縁起の法則」を知って自己中心の考え方を改めること。③「諸法実相」を悟り、全ての存在はもともと「平等」であると知ること。

〈覚えず知らず驚かず怖じず)― 物質的満足に夢中になるばかりに、生老病死の苦が襲うことを知らず、貪欲を厭(いと)う心が起こらない。

〈我身手(しんしゅ)に力あり。当に衣械(えこ)を以て～ 舍より之を出すべき)― 「他力の救い」。「他力」だけで救うのではなく。本人が悟らなければ何にもならない。本当の救いにはならない。

〈火)― 「我・貪欲」。

〈舍・いえ)― 「娑婆世界・人生」。

〈失う)― ほんとうの生き方を見失う。

〈父を視て已(や)みぬ)― 仏の教えを知っても自分の人生に当てはめて考えようとしなない。

〈羊車・ようしゃ)― 「声聞乗」。いい教えを聞いていれば、心が休まる。

〈鹿車・ろくしゃ)― 「縁覚乗」。一人静かに教えを深くかみしめ、悟りを得ようとする。

〈牛車・ごしゃ)― 「菩薩乗」。人を幸せにすることによって、生き甲斐、喜びを得る。

〈其車高広・ごしゃこうこう)― この教えを体得した人の志が高く、心が広々している。

〈衆宝莊校・しゅほうしょうきょう)― 人格が善い徳が整い、「善行」によって光り輝く。

〈周巾欄楯・しゅうそうらんじゆん)― 悪を押し留める心の手すりがかかりしている。

〈四面懸鈴・しめんげんりょう)― 教えを体得した人は、人々の心を清めていく。教化力。

〈張設幟蓋・ちようせつけんがい)― 教えを体得した人は、衆生を守り、かばう力を持つ。

〈雜宝嚴飾・ざっぽうこんじき)― さまざまな方便の教え。人に応じて説く大智慧を持つ。

〈宝繩絞絡・ほうじょうきょうらく)― 「四弘誓願」はじめ、上求菩提・下化衆生の様々な誓願を持つ。

〈紈紵丹枕・おんねんたんちん)― 心に乱れがなく安らかで安定。禅定と智慧を具える。

〈駕以白牛・がいびやくご)― 世のけがれに染まらず邪心がない。行為が清らかな心で行う。

〈膚色充潔・ふしきじゆうけつ)― 智慧のはたらきがイキイキして、正しく充実している。

〈形体姝好・ぎょうたいしゅこう)― 智慧のはたらきが正しく、素晴らしい形で現れる。

〈有大筋力・うたいこんりき)― 人の迷いを除く力が極めて強い。

〈行歩平正・ぎょうぶびようじょう)― 真理に基づき、中道で調和のとれた考え方・生き方。

〈其疾如風・ごしつによふう)― 教えに乗って行けば、まっしぐらに仏の悟りに到達する。

〈僕従侍衛・ぼくじゅうじえい)― 自然と多くの者がその後についてくる。大事に護衛する。

『先に遊戯(き)せしに因(よ)って 此(こ)の宅(いえ)に來(らい)入(にゅう)し』 (一〇四頁 終五行)

『長者(ちやうじゃ)聞き已(お)わって、驚(おど)ろいて火宅(かたく)に入る』 (一〇四頁 終四行)

《愚惟のひととき ⑤》

父親である長者は、子ども達を救うために燃え盛る火宅の中に入って行きました。
—— このことをあなたはどのように捉えますか？ 考えてみましょう。

『亦復何者が是れ火、何者が爲れ舎、云何なるをかを失うと爲すを知らず』 (九四頁 六行)

《愚惟のひととき ⑥》

衆生は「貪欲」というものは我が身を滅ぼすものであり、「本当の生き方を見失う」とは何か？ を知らないでいると説かれています。—— 果たして私は、このことを確かに理解し、捉えているか？ 振り返ってみましょう。

智・慈・法は減ずることなし

(P158・終4行/P118・終5行)

われわれの持っている智慧・慈悲・教えは、その量や質においては仏さまとくらべものにはなりませんけれど、いくら人に与えても減らないことだけは同じです。(中略)
人に与えれば与えるほど多くなるのが、智慧であり、慈悲であり、教えなのです。

《愚惟のひととき ⑦》

私は「智慧・慈悲・法」(教会で学んだ「教え」や、自分が気付いた「悟り・気づき」、そして人に対しての「思いやり」)を、家族や触れ合う人々に、これまで分け与えてきたか(説き、お話ししてきたか)を振り返ってみましょう…。

ここでは、出来なかったことを振り返るのではなく、少しでも出来たことを振り返ってみましょう。(ほんの少しでも出来たことでも結構です。振り返ってみましょう)

世 間

(P166・3行/P124・終4行)

第一に、常に移り変わり流転するところ。即ち⇒「諸行無常」の世界。
第二に全てがそれぞれの中に界(さかい)を持つ。即ち⇒「諸法無我」の世界。

三 毒

(P173・終2行/P130・3行)

〈貪・とん〉物や名誉、権威、他人の愛情を貪り、自分のみならず人をも傷つける。
〈瞋・じん〉わがままから起こる怒り。自己中心の怒り。
〈痴・ち〉真理を知らず、また知ろうともせず、目先のことしか考えない愚かさ。

火宅の意味

(P225・1行/P169・終5行)

「その宅久しく故りて復頓し〜」人の心の姿。正法を聞き心の掃除と手入れが必要。
「鷄・鼻・鵬・鷲〜」 「慢心」。自己中心で、他者を軽蔑し、批判する心。
「蛇・蝮・蠍〜」 「瞋・怒り」。わがままな怒りは人を刺し、噛んで毒を与える。
「鼯・狸〜」 「痴」。暗い所を好む。つまり智慧の光を好まず、無明の中をうごめく。
「屎尿の臭き処〜蛇虻・諸虫〜」 「疑・猜疑心」。高い教えを敬遠する。

「咀嚼踐踢し 死屍を～」 「貪」。貪欲に満ちたあさましい姿。貪の心で満ちている。

以上の「貪・瞋・痴・慢・疑」を、五つの迷い「**五惑・ごわく**」と言います。

「魘・魅・魍魎・夜叉・悪鬼あり～」 「邪見」。因果の法則を無視した、よこしまな考え。

「鳩槃荼鬼～」 「戒禁取見」。正しい因果によらず、間違った教えや戒律に執着する。

「其の身長大に～」 「身見」。仮の身である五蘊によって出来た身を実体だと思ふ。

「其の喉鍼の如し」 「見取見」。間違った思想に固執して、他を受け付けず排他的。

「或いは人の肉を食い」 「辺見」。一方的な極端な考え。偏見。

以上「貪・瞋・痴・慢・疑」の「五惑」と「見」(邪見)を加えて「**六大煩惱**」という。

「今此の舎宅は 一の楽しむべきなし」 「自己中心の楽しみは、真の楽しみではない」。

『三界は安きことなし 猶お火宅の如し』 (一〇七頁 五行)

主・師・親の三徳

(P281・終6行/P213・4行)

日蓮聖人はこの一偈から**主・師・親の三徳**ということを導き出して、お釈迦さまのお徳を賛嘆しておられます。〈主の徳〉とは「一切の衆生を守護して下さること」。〈師の徳〉とは「一切の衆生を教え導いて下さること」。〈親の徳〉とは「一切の衆生を慈愛して下さること」。

『**主**今此の三界は 皆是れ我が有なり / **親**其の中の衆生は 悉く是れ吾が子なり /

師而も今此の處は 諸の患難多し 唯我一人のみ 能く救護を爲す』 (一〇七頁 終五行)

《患難のひととき ⑧》

仏は『今此の三界は 皆是れ我が有なり 其の中の衆生は 悉く是れ吾が子なり 而も今此の處は 諸の患難多し 唯我一人のみ 能く救護を爲す』と説かれています。このことをあなたどのよう
に受け止めますか？ 噛み締めてみましょう。

貪欲これ本なり

(P300・終2行/P236・2行)

欲望自体は悪いことではなく、むしろ人間の原動力となるものですが、それが高じて**貪り・執着**となればたちまち苦の本となり、社会の進展を損なうものとなる。

『諸苦の所因は 貪欲これ本なり 若し貪欲を滅すれば 依止する所なし』 (一〇九頁終六行)

教えを信ずるものは 仏を見る

(P310・3行/P235・終2行)

経典の中に仏身があるのです。(中略) **諸法実相**をしっかりと悟り、信受するならば、今日でもお釈迦さまを目前に仰ぐのと同様なのであります。

『若し人能く 汝が所説を信ずること有らんは 即ち爲れ我を見 亦汝及び比丘僧

并に 諸の菩薩を見るなり』 (百十頁 六行)

ぶつしゆ た つみ 仏種を断つ罪

(P317・2行/P241・3行)

『若し人信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切世間の仏種を断ぜん』

(百十一頁 二行)

ほうぼう つみ 十四謗法の罪(罰は自分が自分に与えるもの) (P325・4行/P246・終2行)

『其の人命終して阿鼻獄に入らん〜』

(百十一頁 七行)

と たいしやう 法華經を説く対象(法華經は誰のためにあるか) (P341・1行/P260・1行)

『利根にして智慧明了に多聞・強識にして仏道を求むる者』 (百十四頁 三行)

『諸の善本を植え深心堅固ならん』 (百十四頁 五行)

『常に慈心を修し身命を惜まざらん』 (百十四頁 六行)

『悪知識を捨てて善友に親近する〜大乘經を求むる』 (百十四頁 終四行)

『瞋なく質直柔軟にして常に一切を愍み諸佛を恭敬せん』 (百十四頁 終行)

『大乘經典を受持して乃至余經の一偈をも受けざる』 (百十五頁 四行)

『佛舍利を求むるが如く是の如く經を求め』 (百十五頁 六行)

しほうじやうじゆ ※四法成就

① 自分は仏さまに生かされ、守られているのだということを、確信すること。

(『一には諸佛に護念せらるることを爲(え)』)。

② いつも善い行いをするように心がけること。(『二には諸(もろもろ)の徳本(とくほん)を植え』)。

③ いつも正しい信仰者の仲間に入っていること。(『三には正定聚(しやうじやうじゆ)に入(い)り』)。

④ いつも社会全体を良くすることを目指すこと。(『四には一切衆生を救うの心を發(おこ)せるなり』)。

(P419・終4行/P313・1行)

しゆい 《思惟のふいかえり まとめ》

今日の『譬諭品』の学びを通して、何を学び取ったか？

(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振り返ってみましょう。

以上